

タウンフォーラムOTARU  
1984 PART 3

●とき 3月20日(祝)PM 6:00から

●ところ 道新ホール(小樽市稲穂2丁目8)



# 港湾都市を再生する ——小樽運河の意味するもの——

第1部 講演「都市再生と運河問題」

講師 宮本 憲一 (大阪市立大学教授)

第2部 研究報告「小樽運河と環境の教育力」

小樽のまちづくりを考える会

## 内発的発展をもとめて

宮本憲一氏（大阪市立大学商学部教授）

大阪市立大学教授 宮本憲一

### （略歴）

1930年台北市に生まれる。  
1953年名古屋大学経済学部卒業。

現在、大阪市立大学商学部教授、  
日本環境会議事務局長。

専攻は財政学、地域経済論。

公害問題、環境問題、都市問題など非常に幅広い分野の  
研究に従事。

数年前、住宅や都市の問題に関して学際的研究を進めようと、他の四人の科学者と共に「都市研究懇話会」を発足。1981年5月には、ロンドンで国際住宅都市問題研究会議を開き、その成果を「住宅人権宣言」としてまとめる。

### （著書）

#### （経済）

- 「都市経済論－共同生活条件の政治学－」（筑摩書房）  
「社会资本論」（有斐閣）  
「都市の再生－日本とヨーロッパの住宅問題」  
（共編・日本放送出版協会）  
「恐るべき公害」（共著・岩波書店）  
「日本の公害」（共著・岩波書店）  
「地域開発はこれでよいか」（岩波書店）  
「財政改革」（岩波書店）  
「日本の都市問題」（筑摩書房）  
「日本の環境問題」（有斐閣）  
他多数

いま、世界的にみて資本主義国の都市は転換期にきており。古い大都市圏や工業都市が衰退をはじめ、深刻な都市問題が生じている。小樽の衰退は、札幌への中枢管理機能の集中と港湾（海運）の函館への重点移行などとともにうものだが、他の地域で進行中の世代交替あるいは「再農村化現象」と無縁ではない。

このような都市の衰退をくいとめ、再生することはなかなかむずかしい。多くの都市は、このような状況におちいると、焦りを生じ、なんとか即効薬をみつけようとして、大企業の誘致や国家的大事業（たとえばエネルギー基地、新幹線、高速道路など）をもとめる。しかし、これはバクチか身売りと一緒にで、成功する確率は小さく、従来の地域開発の教訓からいって、短期的な効果があつても、長期的には環境破壊を生み、中央依存型のいびつな都市をつくってしまう。

そこで、いま考えるべきことは、地元の企業や住民の創造的なエネルギーと技術・知識をひきだし、その町の歴史・文化・風土にあった発展の道をさがしだすことである。大企業や国家依存の道を「外来型開発」とよぶとすれば、この新しい道は「内発的発展」とよべるであろう。実は、国家財政が空前の赤字国債の累積になやみ、産業構造の急速な転換のために未来の業種が確定せず、さらに貿易まさつから、国内より海外への投資が要望されている時なので、大規模な工場、事業所あるいは公共事業の誘致は「夢物語」となってきていている。これからは否応なしに、「内発的発展」が地域再生の主要な方法となるだろう。

内発的発展を考える場合に、大切なことは過去の都市開発の失敗をくりかえさぬことである。それはいろいろあるが、さしあたって小樽市に重要なのは次の点である。

1. 単純型ではなく、複雑な産業構造をもち、できるだけ域内の産業連関の複雑な経済をつくり上げる。
2. 先端技術にのみ走らず、雇用効果の大きい産業をそだてる。
3. 自動車社会をできるだけつくらないようにして、域内交通は鉄道、バスなどの大衆交通機関を中心とする。
4. 歴史的な文化財や景観を維持し、街なみをそろえ、緑ゆたかで水の美しい街づくりをする。
5. 開発の目標を経済主義にせず、福祉、教育、文化などの総合的なものとする。
6. 住民参加の制度化をはかる。地域開発は「もの」をつくるのではなく、その都市を愛し、その都市の発展を真剣に考えて努力する「ひと」をつくることである。そのいみでは地域開発の目的は、マンフォードのいうように住民の「共同学習」による「知的参加」をどのようにしてすすめるかであろう。

小樽のまちづくりを考える会とは、

研究メンバーは、

小樽市では、小樽運河を中心とする歴史環境の再生がまちづくりの大好きな課題にかけています。しかし、都市の衰退のなかで問題が複雑化しており、再生のための理論や方策、体制、人材には大きな立ち遅れがみられる。本研究では、再生の手がかりとして「環境の教育力」という概念を設定し、市民のまちづくり運動と運動しながら、地域の内発的再生の可能性と方法論を導くことをめざしている。「環境の教育力」とは、一応、「まちづくり意識を育てる力」とし、次の内容で構成されるものと仮説をたてた。	
環境の教育力	環境が構成する力 環境のもうアメニティ
	環境に係わる人間集団が構成する力
研究の方法として、1.歴史環境の現状と課題、2.市民意識と環境学習の実態、3.環境イベント型市民運動の展開について調査、分析をおこない、それをつうじて「環境の教育力」を理論化する。さらに、「運動の中で生きてくる概念」としてその意味を深めていくことを目標とする。	

財團法人 トヨタ財團

理事長 豊田 英二 殿

様式 5

昭和57年8月20日

第2回研究コンクール“身近な環境を見つめよう” 助成番号 2C-022

### 研究実施計画書

研究題目	まちづくりにおける環境の教育力と環境イベント型市民運動の展開に関する研究 —— 小樽運河問題を通して						
研究助成金額			百万	2	0	0	0
研究助成期間	昭和 57 年 10 月 15 日 — 昭和 59 年 10 月 14 日						

研究団体名	小樽のまちづくりを考える会						
研究団体代表者・氏名	佐々木 順次郎 (ささき きよじろう)						
研究団体事務局所在地	(〒041) 北海道 小樽市天保町1-11-9 THINK (電話) 0134-22-1669						
連絡責任者・氏名	平田 真結美 (ひらた まゆみ)						
連絡先(1)	(〒041) 北海道 小樽市天保町1-11-9 THINK (電話) 0134-22-1669						
連絡先(2)	(〒041) 北海道 小樽市天保町1-11-9 THINK (電話) 0134-22-1669						

研究者 氏名	年令	所属機関・職名	専門・専攻
(団体代表者) 佐々木 順次郎 (ささき きよじろう)	31	小樽の街づくり実行委員会・会員	
(共同研究者) 平田 真結美 (ひらた まゆみ)	30	ミニコミ誌「ええと・小樽」編集長	
中 一夫 (なか かずお)	55	「運河紙芝居」チーム・代表	
渡辺 真一郎 (わたなべ しんいちろう)	33	小樽運河研究講座・実行委員会・顧問	
峰山 嘉美 (みねやま かみ)	68	小樽運河守護会・会員	
芳川 雅勝 (よしかわ まさかつ)	40	元 小樽青年会議所・理事長	
五十嵐 義倫 (いがらし ぎりん)	51	小樽緑小学校・教員	
増田 又喜 (ますだ よしよ)	57	小樽商業高校・教員	
小原 定徳 (おはら じょうとく)	32	小樽市役所	
河原本 起生 (かわばら きせい)	59	小樽運河守護会・会員	社会学 行動科学
井上 順 (いのう じゅん)	46	小樽商科大学・教授	経済史
足立 審士夫 (あだて しんじふ)	49	北海道大学工学部建築学科・教授	住居地計画・都市景観
越野 駿 (こしの しゅん)	44	同 上	助教授 建築史・建築意匠
和田 良道 (わだ りょうじ)	51	神戸地域問題研究所・所員	都市計画
(共同研究者) 石塚 権明 (いしづか けんめい)	30	北海道建設工芸専門学校・講師	都市計画
森下 浩 (もりした ひろ)	58	北海道大学工学部建築工学科・助教	住居地計画・都市景観
小川原 格 (おがわら かず)	33	小樽・市の街づくり実行委員会・副会長	
長谷川 伸三 (ながたに しんぞう)	44	小樽商科大学・助教授	経済史
吉城 淳一郎 (よしきわ じゅんいちろう)	35	小樽商科大学・助教授	経営法理・公法
上田 規一 (うえだ けい一)	19	小樽商科大学・学生	
草川 光子 (くさかわ みつこ)	44	主婦・朝日新聞コム店長・店舗統括	
北田 智子 (きた ちこ)	28	ポートアースティバル実行委員会・委員	
吉岡 雅美 (よしおか まさみ)	22	ポートアースティバル実行委員会・委員	
川更香 貴希子 (かわさら ききこ)	24	小樽市役所	

(昭和57年8月20日現在)

の24名（その後、2名ふれて現在26名です）。

以下は、中間段階の研究成果をまとめた資料である。

図-1. 研究のフロー

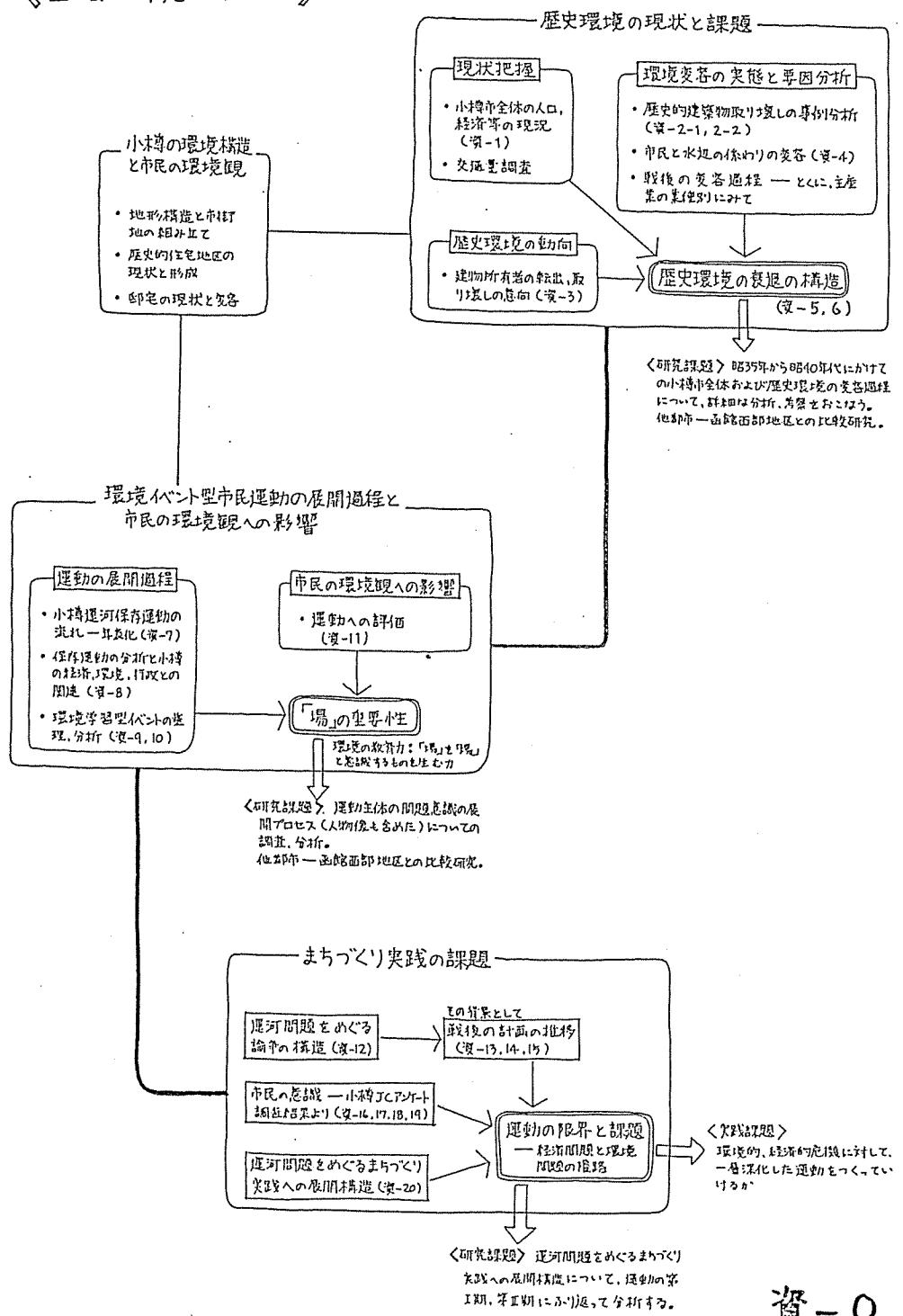


表-1. 小樽市の人口、経済等の現況

指標	小樽市	全道	全道構成比	備考
人口 (s55)	180,728人	5,575,989人	3.2%	s5で 5.2% s25で 4.2%
卸売販売額 (s57)	246,221百万円	13,725,602百万円	1.8%	s29で 21.4%
製造品出荷額等 (s56)	176,358百万円	5,127,699百万円	3.4%	s27で 6.9%
港湾取扱貨物量 (s50)	5,180千トン	100,001千トン	5.2%	ビ-7時 M30で 46.6% s23で 30.5%
銀行預金額 (s50)	154,182千円	4,200,631千円	3.7%	ビ-7時 T10で 30.2% s25で 12.9%
生活保護率 (s57)	27.9%	20.1%	—	全道32都市中、岸鉛都市 うち市を除くと第一位。
財政の歳出で、民生・衛生費の占める割合 (s56)	35.1%	21.9%	—	全道32都市中、 第一位
歴史的建築物現存棟数 (近代建築総覽、s55)	114棟	627棟	18.2%	運河沿いの石造倉庫が含まれて ない。これを入れると約25%

資料-1

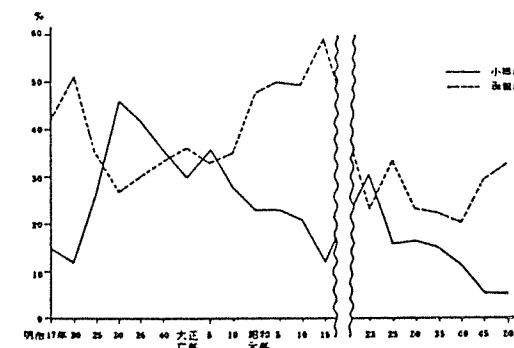
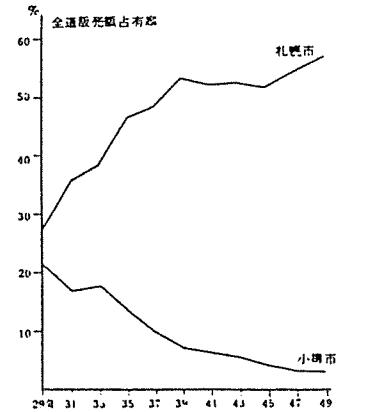


図 小樽港、函館港取扱貨物量道内港占有率推移

出典: 「小樽市都市診断報告書」  
(株) ECEC, 1978年)出典: 「小樽市都市診断報告書」  
(株) ECEC, 1978年)

資料-0

## 表一 昭和期の小樽をめぐる主な出来事

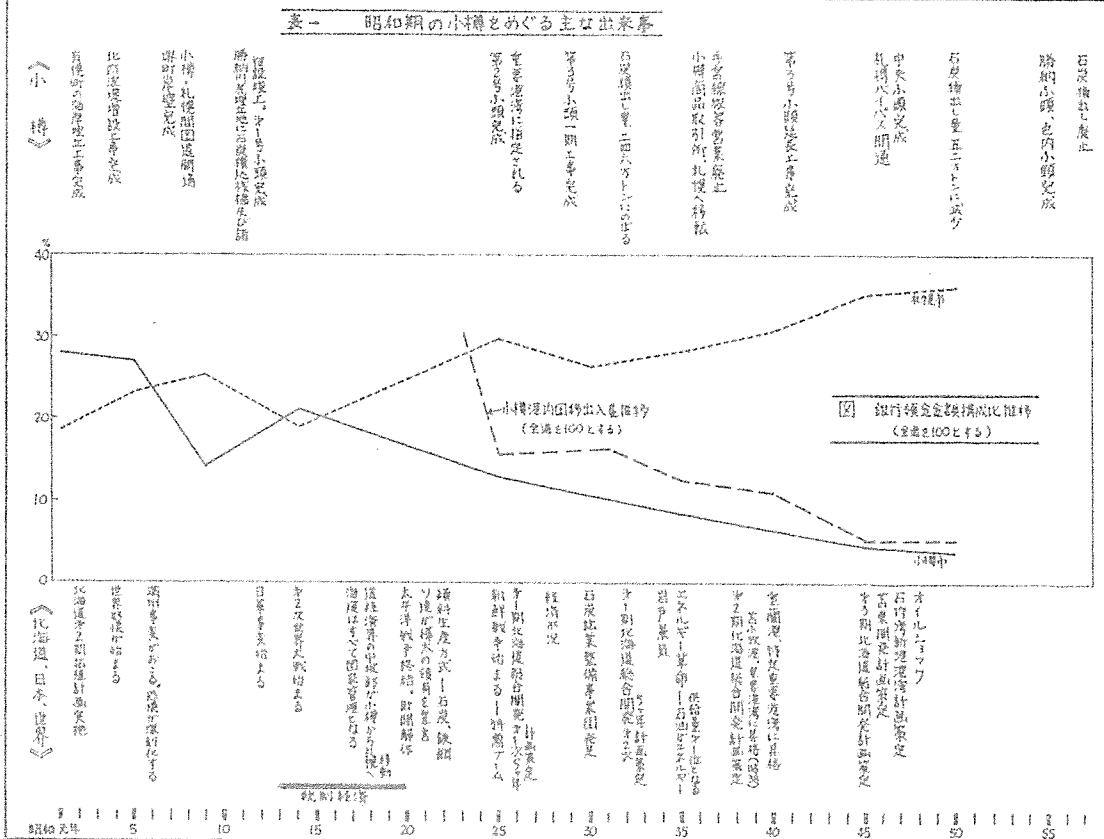
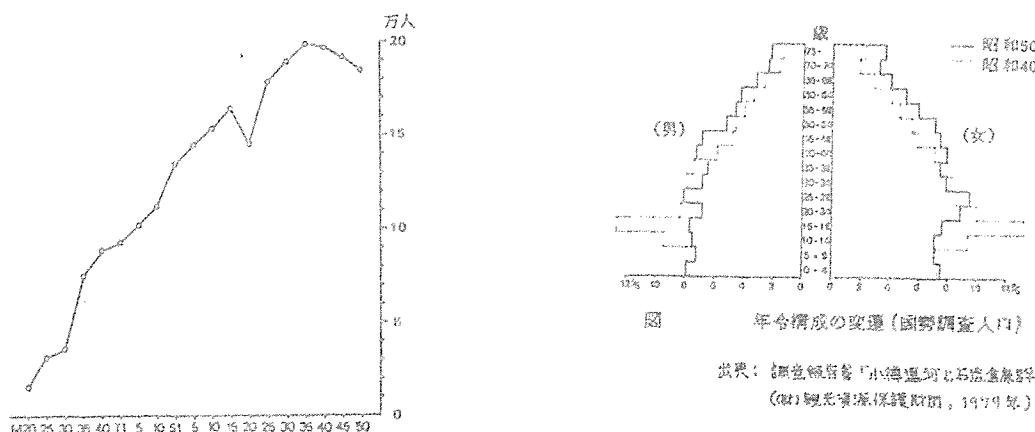
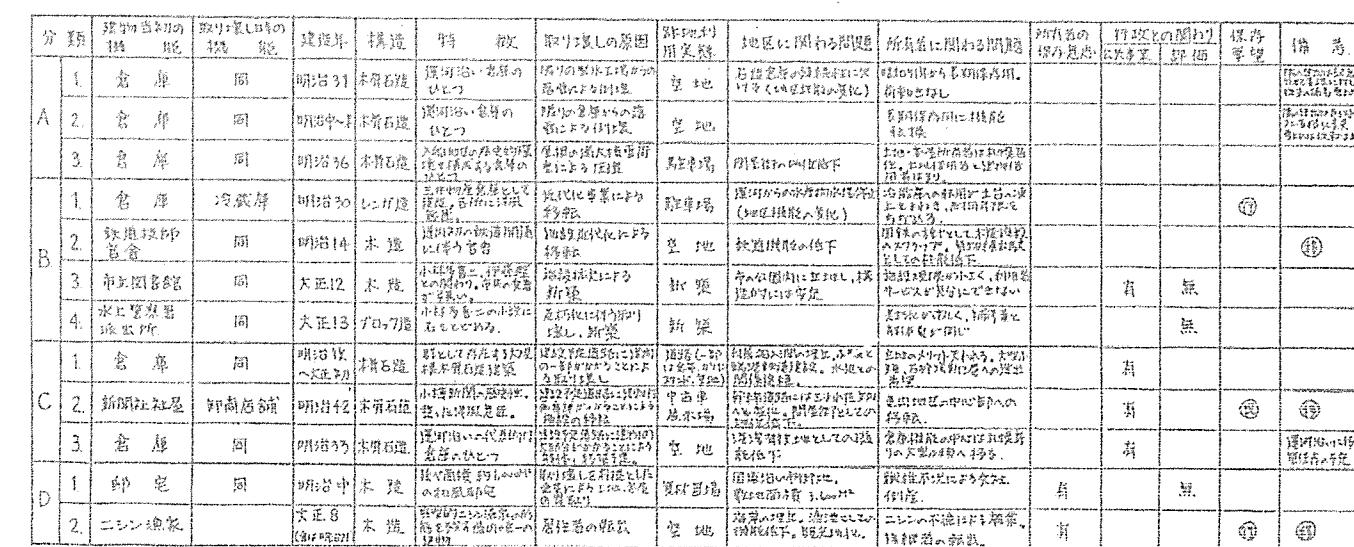


表-2. 歴史的建築物取り壇しの経緯



四 人口の推移

註釋：調查報告書「川越運河と石炭貿易」  
(川越市資源係調査課、1979年)



卷-2-2

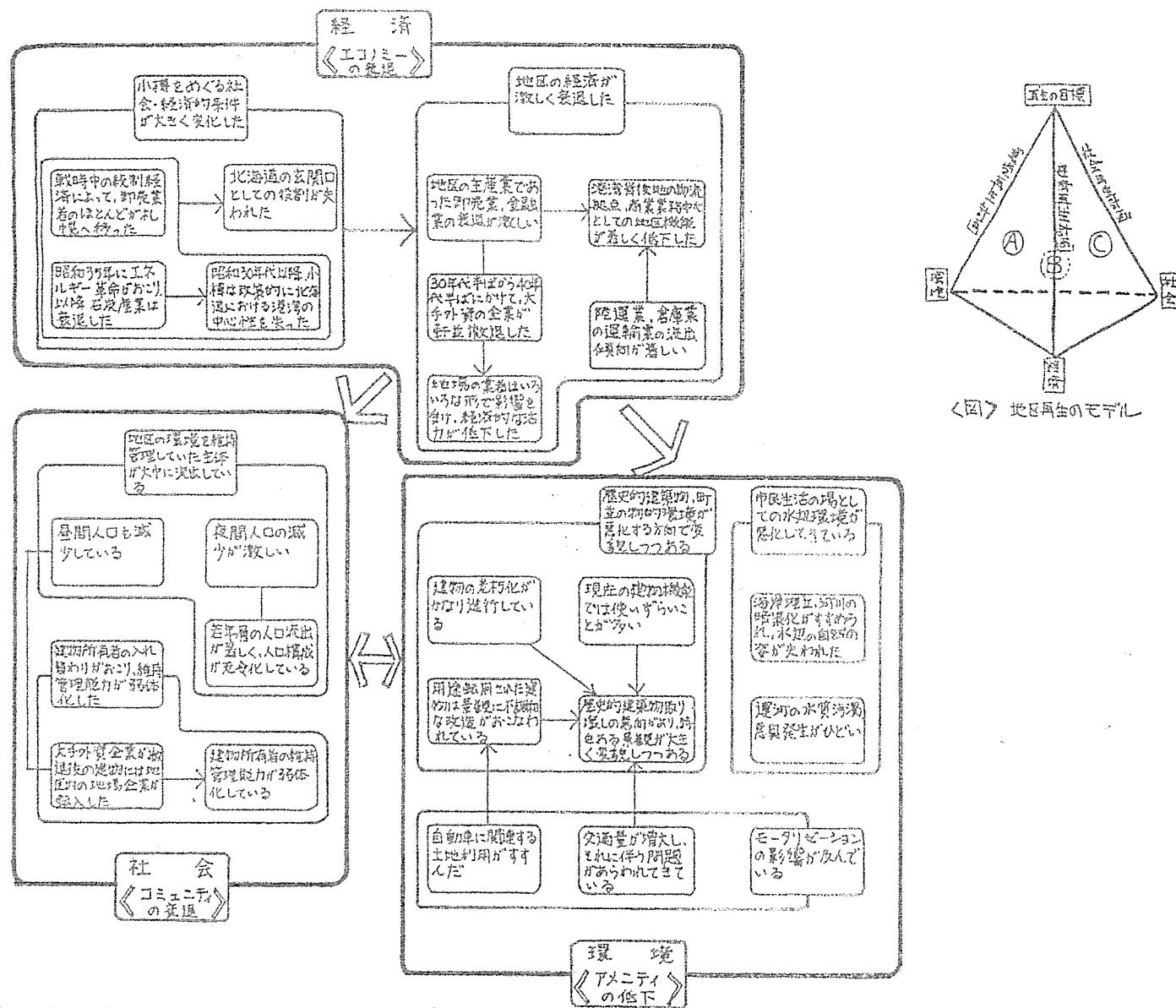


図-5. 遠河・色内・緑山手地区の衰退の構造

者 - 5

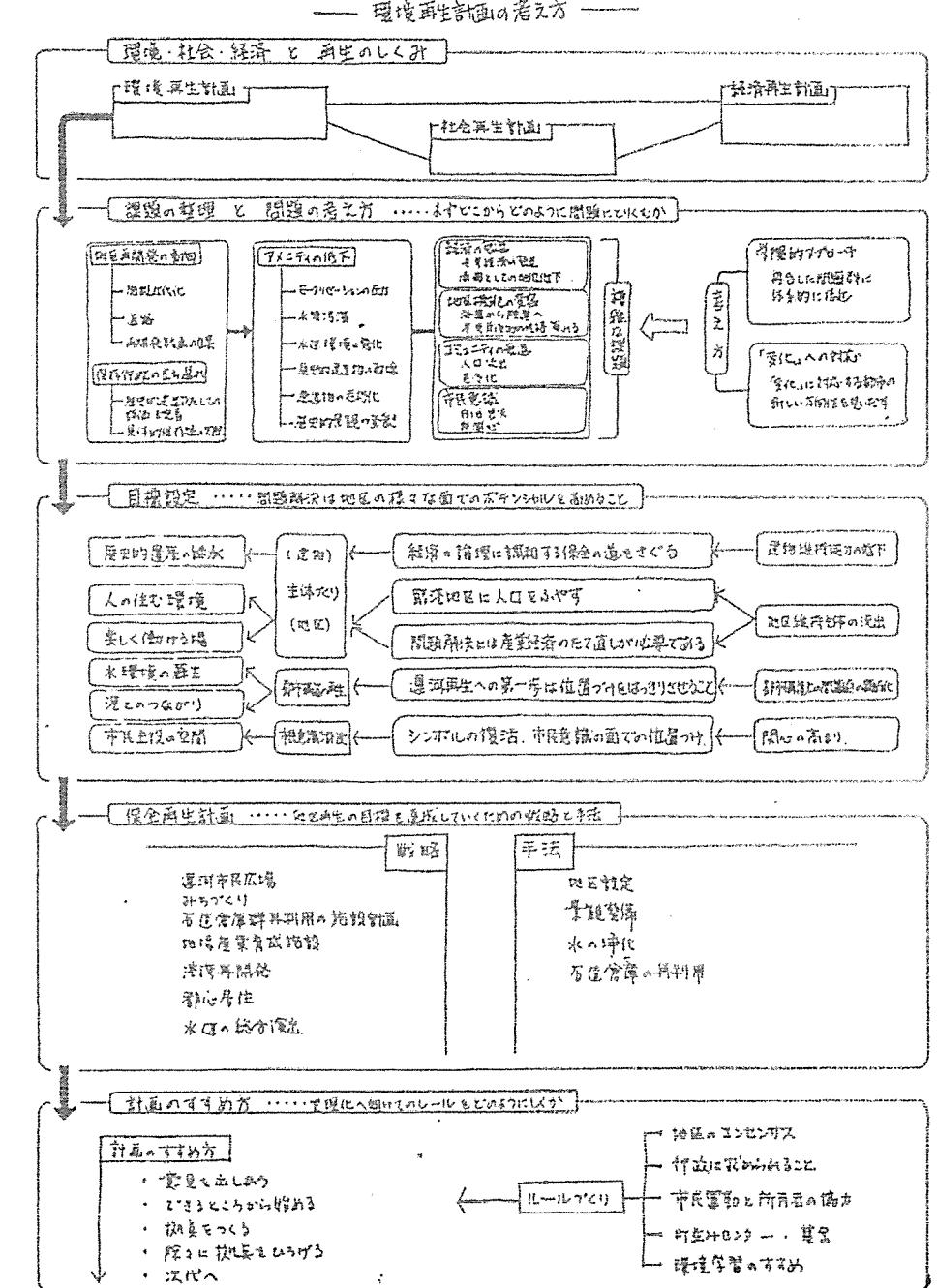


図-6. 環境再生計画の考え方

- 6

&lt;表-3&gt;

## 小樽運河保存運動の歴史(概略)

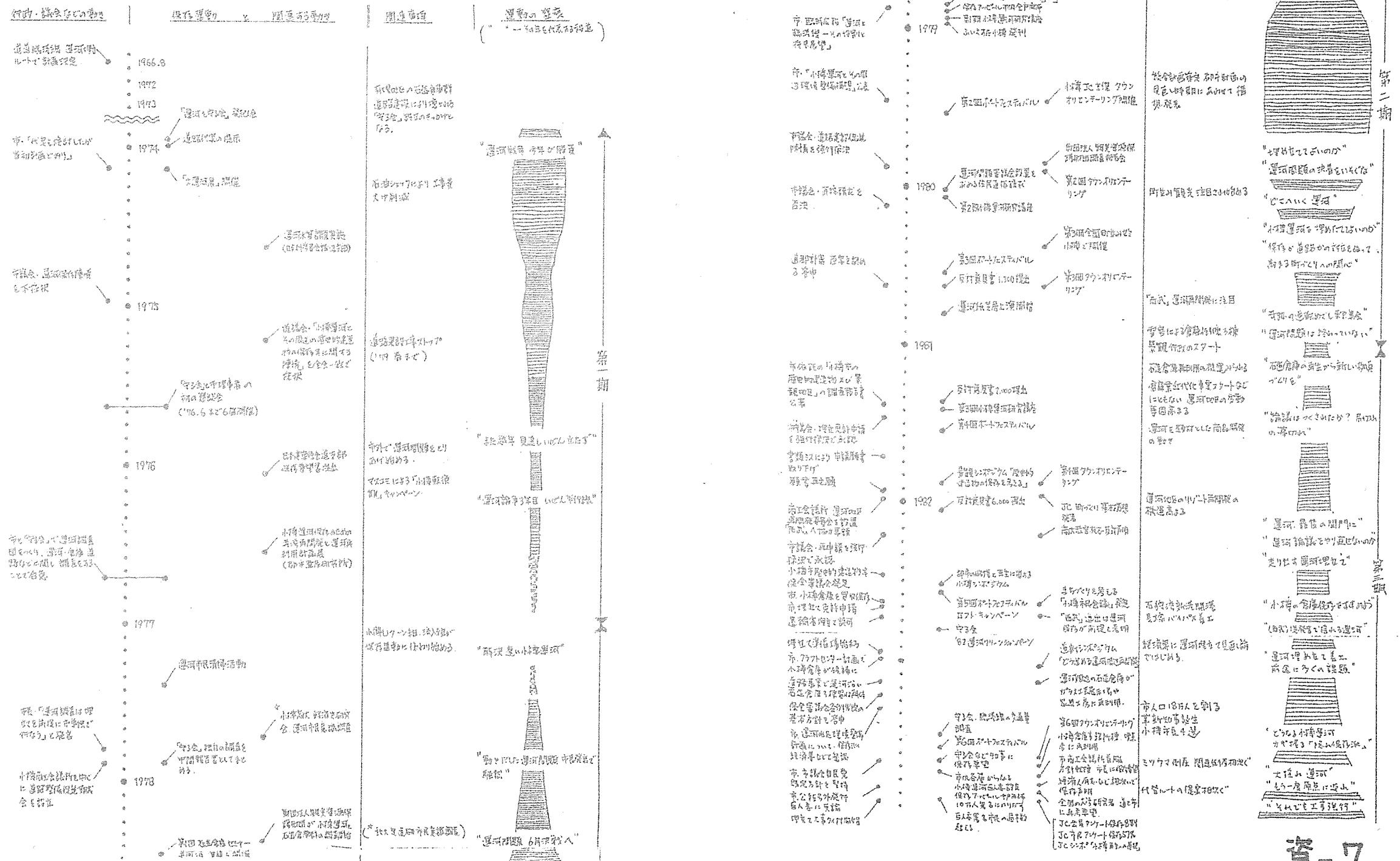


表-5 「環境學習型」イベントの歴史

イベント	開催地	内容	実施状況	成果	評議
ポートフォニアル ・イン・オタル	・運河の復活と市民に アピールしたい ・文化活動の成長を 育てる場をほしい	・運河での祭り ・運河の水辺・緑・生き 物などを活用 ・市民が楽しむイベント を企画	・1978年～ ・年1回25～6回開催 ・人出 1回平均1034人	・新しい市民連絡会の「運」 を生んだ ・運河の環境資源としての 可能性を市民に伝承 ・観光活性化を始めた ・文化活動の創造的な ・三條の運河に対する 意識を啓発した ・保存運動のシンボルと なった ・市民の意識立ち始め た	・運河の環境の向上には つながっていない ・内容にマンネリ化が みられる
運河保全運動 のメンバー 地域で文化活動 を行なう若者	・水辺で何かしたい といふ若者の「自己 表現」	・手づくり、手作り			
「水辺環境研究 会」	・運河問題に対する 認識を深めたい ・市民の運河問題を 考えさせ、かけき くつくりたい	・講演とディスカッション ・端広、テーマの設定 ・運河問題を考える機会 を知る ・運河問題を学ぶ ・研究会開 ・講座教科登録 ・手作り	・1978年～ ・共々32回 開催 ・受講者 1回平均50人	・一般市民の運河に対する 「場」をつくった ・運河問題を考える機会は流 され、問題意識を深め る方向性に欠ける ・認みをあらわす会員、 理論化に傾いて ・かえり環境に対する意識 を啓発した	
ミニコミ実行 会員	・主張をしたい ・まちのことをもっと知 ってほしい	・まちづくり運動の実践誌 ・わかりやすく、地上の情 報を提供する ・読者に対するアンケート の実施 ・手作り	・1978年～ ・週刊 15号 ・講読者数 約1,500人	・ミニコミとして地域に 足りしつつある ・何を主張したいかが 明確に意識されてい ない ・地域の問題を主体的 に発見していく努力が 不足している	
「まちづくり運動の メンバー	・まちづくりに貢献する 所をしたい ・歴史的所産のみ存在 をひらくアピール したい	・歴史による町並みづくり ・歴史リクリューション ・政策コースの設定と 解説員の配役 ・手作り	・1979年～ ・年1回 6回実施 ・受講者 1回平均20人	・町並み歴史の構造を 始めた ・主導権の町並みに対する 意識を啓発した ・実行所員は、重ねて 価値意識を深めえた ・市民の町並みに対する 意識を啓発した	
タウン・オリエンテー リング	・まちづくりに貢献する 所をしたい ・歴史的所産のみ存在 をひらくアピール したい				
小学校卒業記念 のメンバー					
放送局の上演 会員	・運河への思いを何とか 表現してみたい ・運河復活と連携し てみたい	・運河を題材にした 放送局 ・河川放送中間に音楽 で上演 ・音楽に合わせ放送 ・観客へのアンケート実施 ・手作り、手作り	・1980年～ ・60回上演	・手作りの環境資源の 実践 ・市民への反応をいかに 感じさせることができ る ・上演実験など反響が あり	
運河保全運動 のメンバー					

「地域での自己表現」  
小樽で生きる者として、自分が今  
最もやりたいことを具体的に表  
現する

&lt;動機&gt;

「現場主義」  
運河という現場で自己  
表現する、実践する

「参加しやすい」  
市民の誰もが参加できる開かれた  
企画と创意に富んだ方法

&lt;方法&gt;

「場が生まれた」

・新しい市民連絡会の場 …… 人と人とのつながり、ふれあい  
・語り合う場 …… 運河問題を考える機会の提供  
・再発見の場 …… 運河地区の環境資源としての可能性  
の展示  
建物や音楽の複合感や価値意識の場  
りがこし

町並み観光の発展の発まり

・学習・教育の場 …… 保存運動の学習活動や理論化への影響

&lt;成果&gt;

(運動主体)

「運動主体の意識を変えた」  
自前精神。まちづくりの担い手  
は市民自身であるという認識

(市民意識)  
「環境に対する市民  
の認識をひろげた」

「保存運動の外堀をひ  
ろげた」

環境の向上へとむすびつ  
<方法論の展開>

まちづくり意識の啓発

&lt;課題&gt;

図-7 環境イベント型市民運動の分析

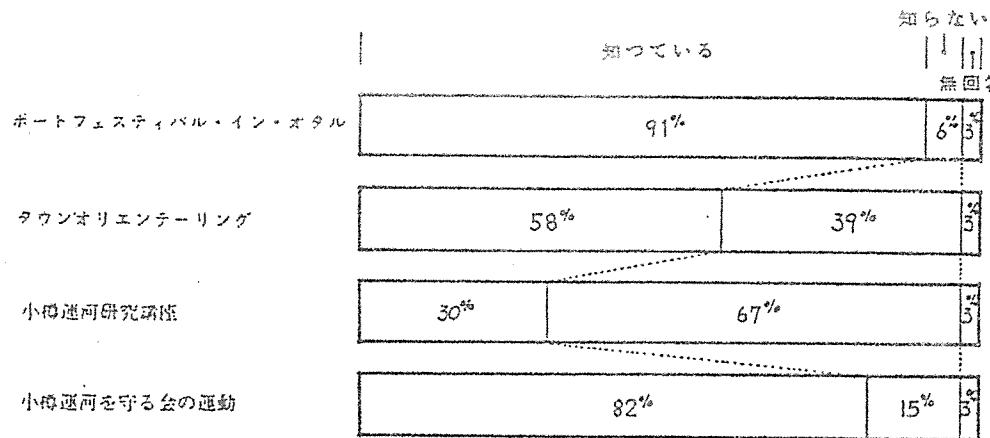


図-8. 市民運動の認知について  
—あなたはどういう運動があるかご存知ですか。

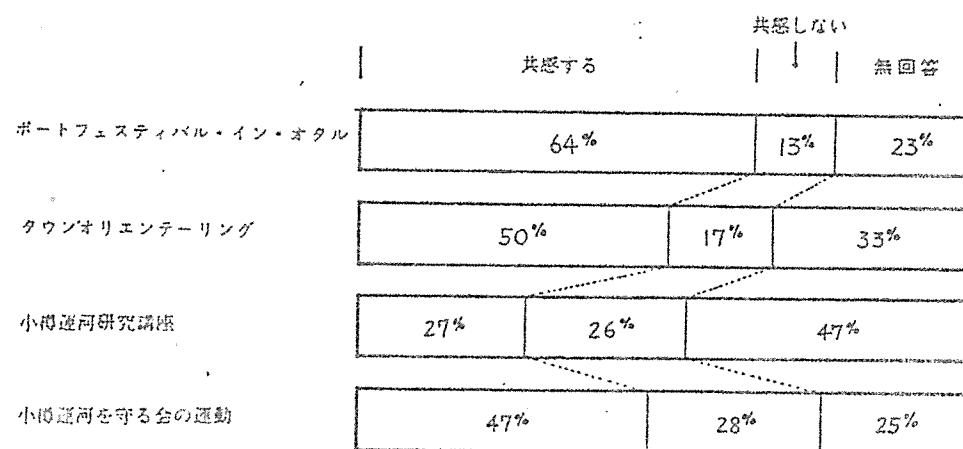


図-9. 市民運動への共感について  
—あなたはこれらの運動に共感しますか

表-6. 市民運動に共感する理由

運河のことを見直すきっかけになった	91人
古い歴史的な建物や町並みを見直すきっかけになった	92
小樽の観光価値を高めた	75
市民のまちへの愛着を深めた	67
人と人とのふれあいが生まれた	65
人と語りあう話題を提供してくれた	60
運動の趣旨に賛同する	44

《環境イベント型市民運動への評価》

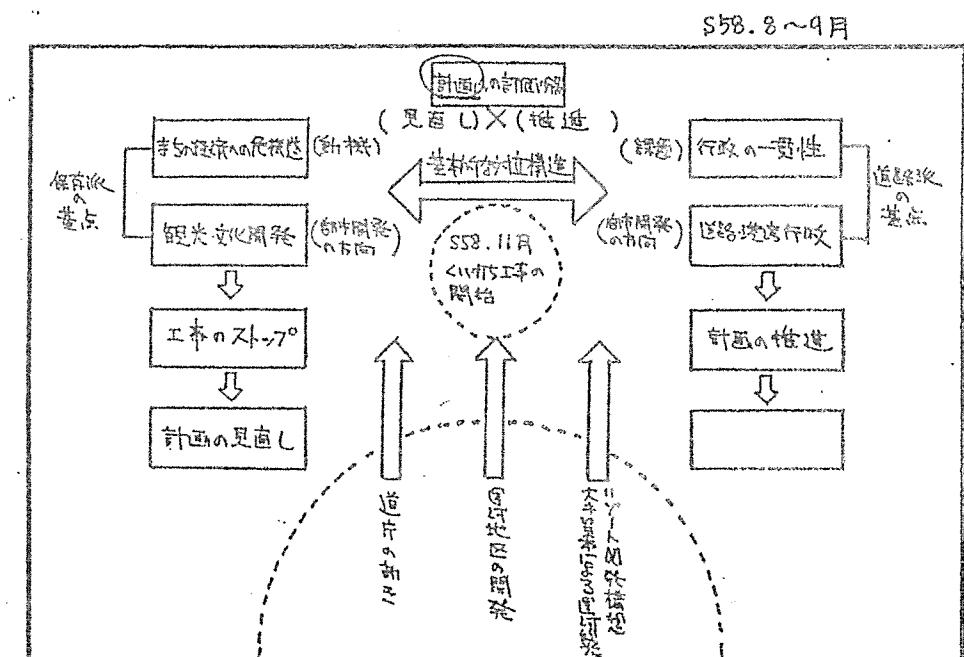
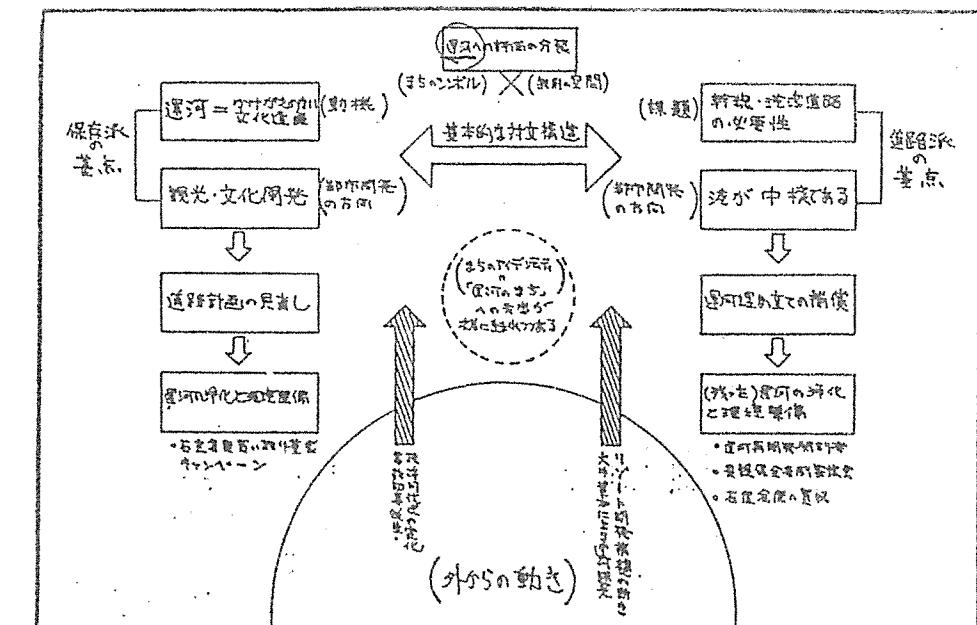
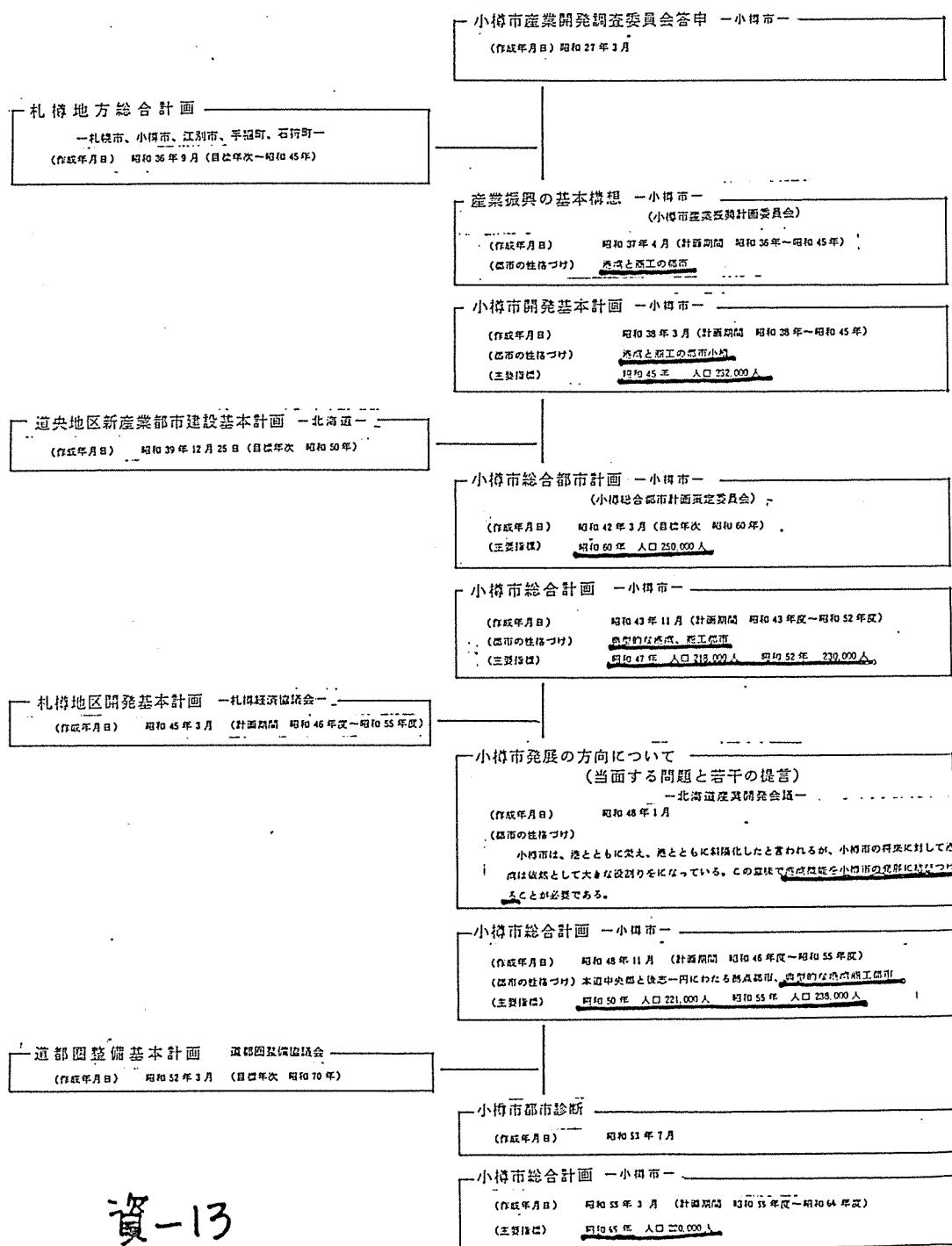


図-10. 運河問題の論争の構造

表-12.

図-11 戦後の計画の推移



資-13

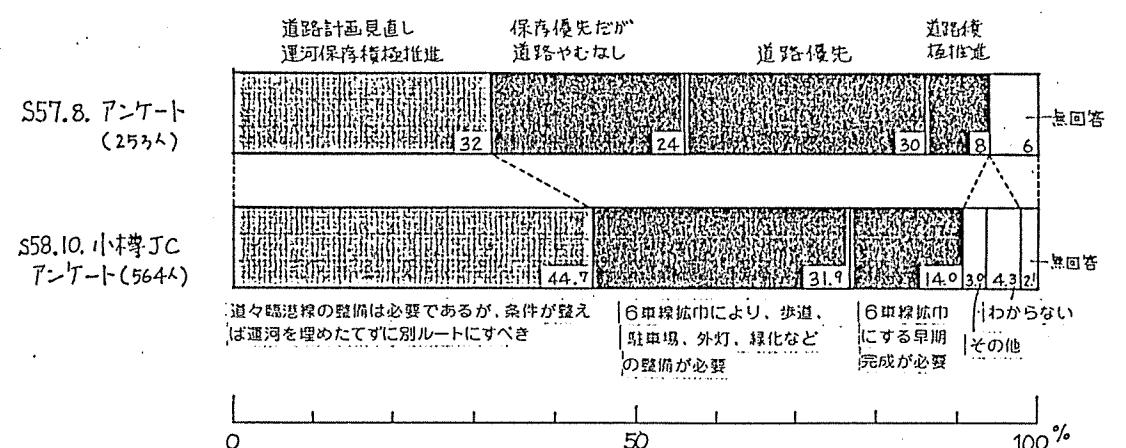


図-13-6 運河問題に対する市民の意識

資-18

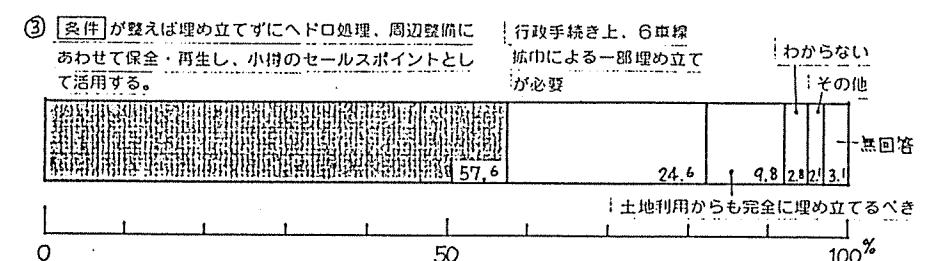
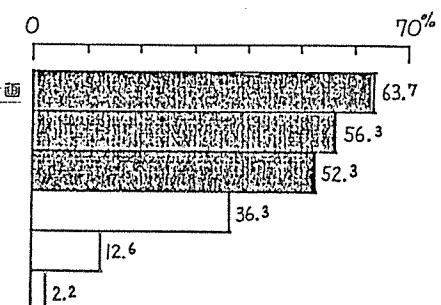


図-13-7 あなたの望まれる運河地区再開発（再整備）を実施する場合、臨港線、運河はどうあるべきだと考えますか。

- 運河についてはいかがですか  
(道々臨港線拡幅事業も含めてお答え下さい)

図-13-8 ③を選ばれた方は、その条件についてもご回答下さい  
(いくつでもかまいません)

資-19

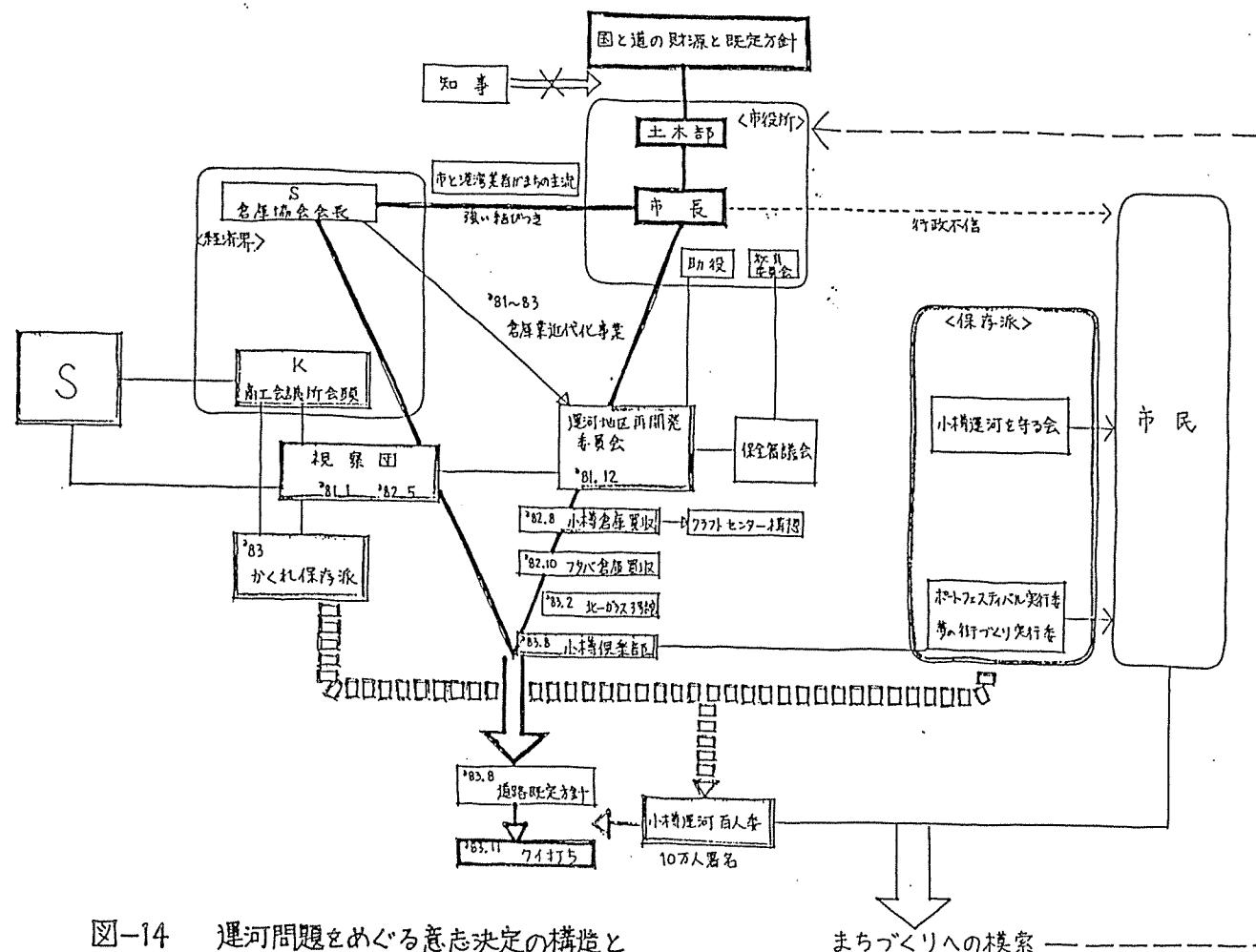


図-14 運河問題をめぐる意志決定の構造と  
まちづくり実践への展開構造

資-20

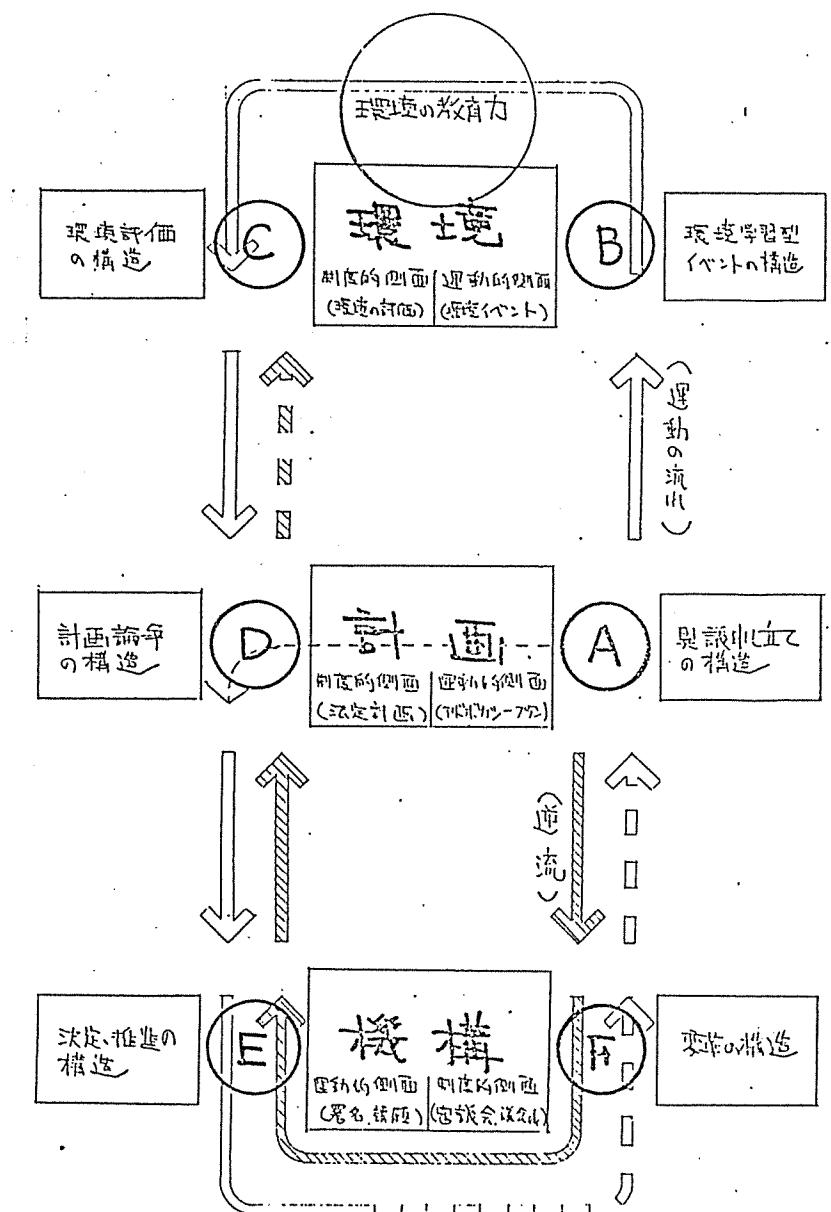


図-15 まちづくり実践への展開と環境の  
教育の位置づけ

資-21

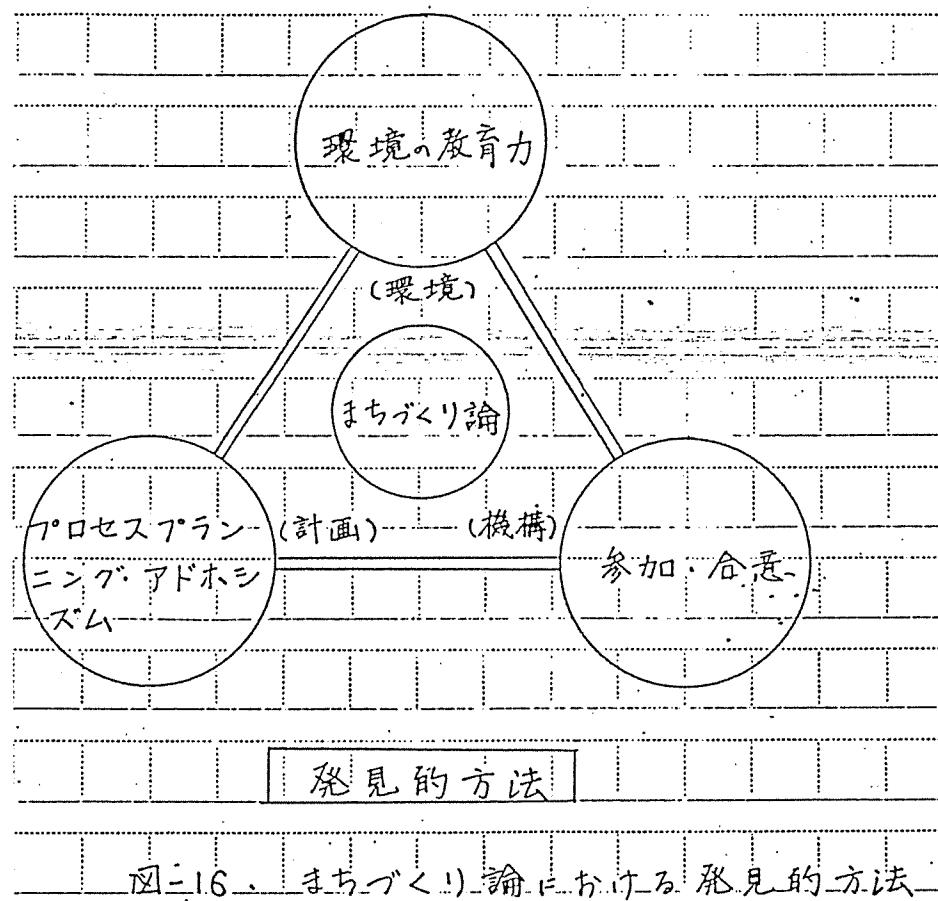


図-16 まちづくり論における発見的方法

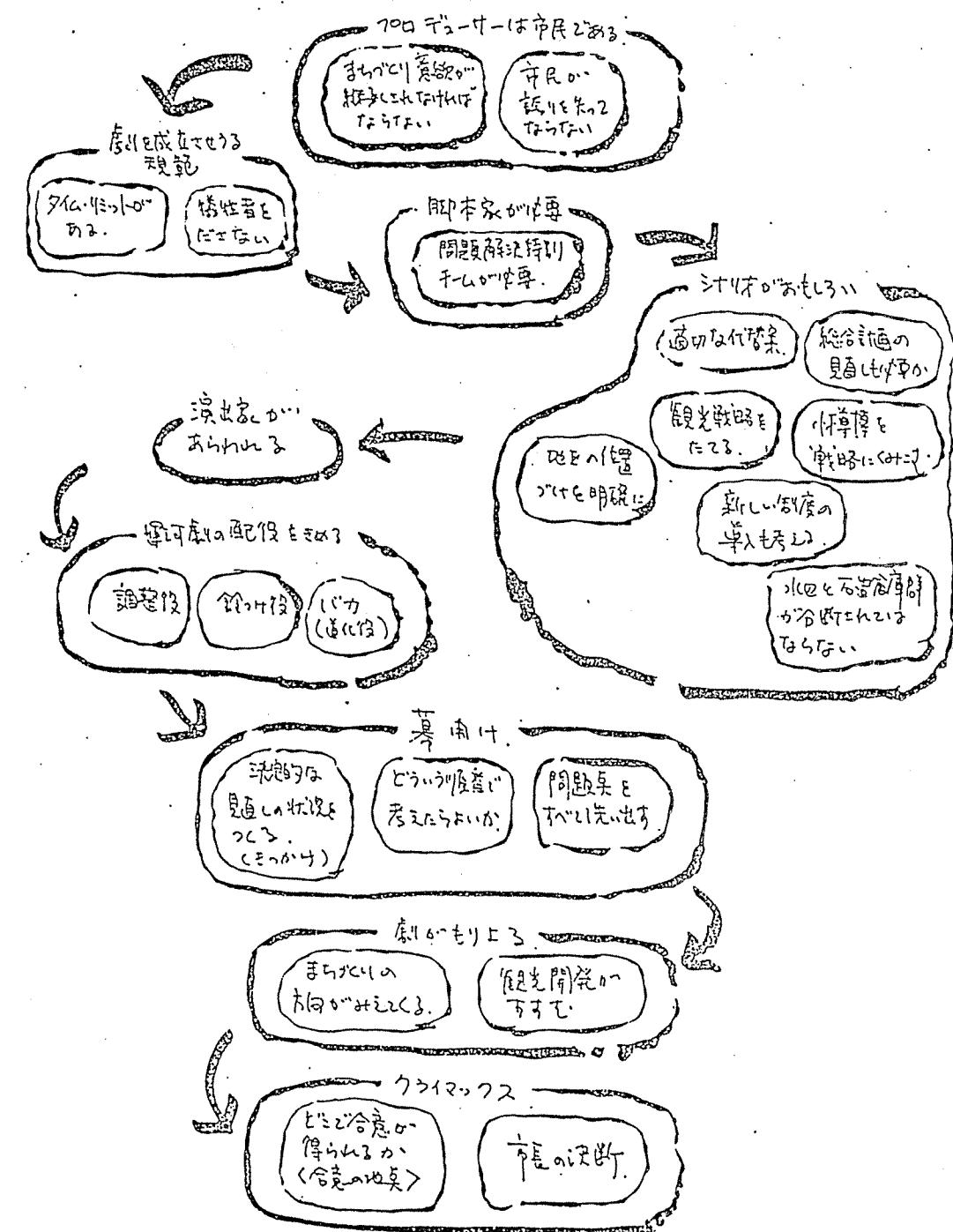


図-17 運河問題解決の方向